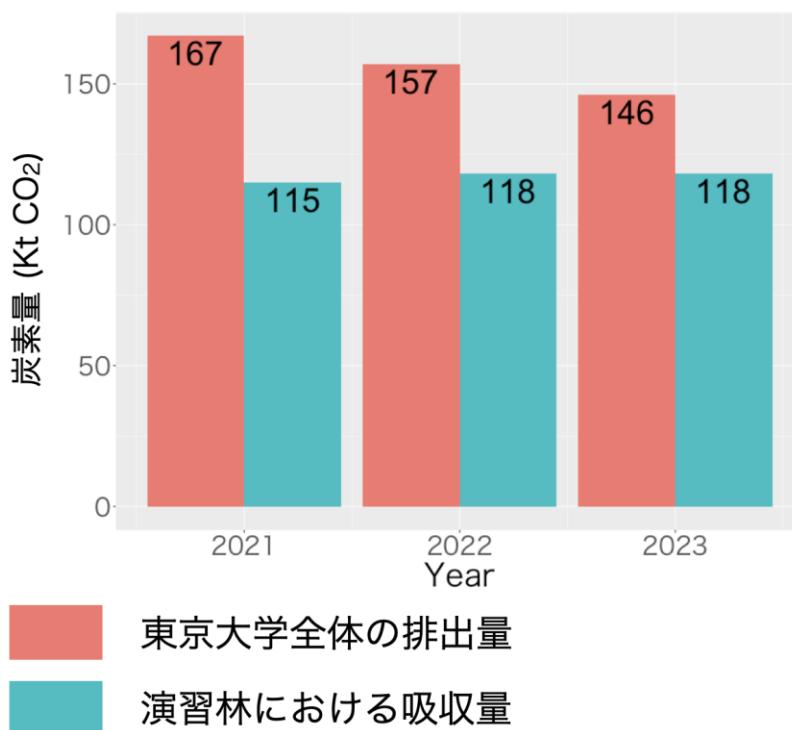


演習林におけるこれまでの取組において演習林内の森林は年間およそ120Ktの二酸化炭素を吸収していると推定されておりこの値は東京大学全体の排出量のおよそ80%に相当します。



しかし従来の推定手法は、推定の空間解像度や時間解像度が粗く、実際の森林管理等に活用していくには不十分です。この課題を解決するために、フォレストGX/DX協創センターでは航空機からのレーザー測量で取得した高解像度の地表高・樹冠高データに機械学習法を用いて高精度で炭素吸収量を推定する手法の開発に取り組んでいます。これまでに、森林の炭素蓄積量は、樹冠高が同じであっても、斜面方位や尾根か谷かなどによって大きく異なるために微地形を考慮してモデリングする必要があることなどが明らかになってきました。